



Ignis

イグニス = 炎

2023 年度冬号

発行者 六甲学院宗教部

発行日 2023 年 12 月 23 日

今回は、9月と11月に行われた Magis の日の朝礼でのお話から、佐藤雅孝先生と青木光博先生のを紹介致します。

9月27日 Magis の日のお話し

無条件の善意とは

佐藤雅孝(教員)

みなさん、おはようございます。文化祭が終わり、まだまだ余韻に浸っていたいと思う人も多いでしょう。文化祭 はいかがでしたか？一生懸命やりきることができた人は、特にどのような点でそのように感じたでしょうか。文化祭 で企画大賞をもらえると嬉しいですね。私は中高生時代、鉄道研究の企画に毎年参加していました。企画の責任者の経験もしました。鉄道模型の線路配置を考え、走らせる車両の組み合わせを考えました。展示物の原稿作り、写真の準備、印刷物の作成、文化祭前日はほぼ徹夜。そうして迎えた文化祭当日。鉄道研究のメンバー全員 で一丸となって他の企画のことは目もくれず、朝から夕方まで大勢のお客さんに対応しましたし、私たち自身も 楽しみました。シフトなんてそもそも存在しない。最優秀企画賞をいただきました。今思い返せば、最優秀企画賞なんて狙っていませんでした。同期も後輩もみんな頑張ってくれたおかげでお客さんがすごく喜んでくれて、投票してくれた。気付けば、文化祭のフィナーレでステージに呼ばれていました。

これからとても大切な話をします。内容が重たいと感じる人がいるかもしれませんが、頑張っけて聞いて欲しいです。今日の振り返りで書いて欲しいことは、「無条件の善意について」です。もう少し簡単な表現をします。「人に言えないようなことをしない」は当たり前ですよ。すごい資産家がいたとします。しかしその資産が貧しい人から搾取したものであったら、人に言えないですよ。ですので生きていくうちに良いことをしようと心がける必要があります。一見良さそうなことをしていても、実は自分に金銭的な大きな見返りがあるとか、政治家が自分の票集めにやったとか、だとしたら。子どもはたくさん愛情を与えられて育っていきます。そしていつか、もらった愛情を 誰かに注ぐことができるようになるのです。これが大人になっていくことです。自分の持っているものを無条件に 与えるということこそが、善意に満ちたことなのではないでしょうか。私は分かち合いのつもりでこれから話をします。皆さんは是非開かれた心で受け止めて下さい。

私は夏休み中にとっても貴重な体験をしました。イエズス会四校の研修で鎌倉の十二所というところにあるアルペナンミンセンターという施設を訪ねました。アルペナンミンセンターは私にとって思い出深い場所です。私は 2013 年 2 月に八日間の霊操(黙想会)のため、十日間ほどここで過ごしました。完全沈黙で祈り続け、神と自分の 一対一の間接を作るためです。当時の私は 20 代後半。自分の将来について考えていました。人生における重大な決断をするためには、偏りのない心で神の声を聞き、私自身の自由意思で神に従うことを選ぶ必要があります。深い祈りの中で私は結婚に向けて歩いていくことを決めました。その後、様々なことがありました。母や次女の重い 病気を一緒に乗り越えました。その都度自分に何が出来るのかを祈りの中で考えました。私の悪い癖で「直接何かをしなきゃ」って考えてしまうんです。私は医師ではないので、直接病気を治療することは出来ませんから、無力 感を感じたこともありました。落ち込む私は「佐藤さん、祈りの力は大きいですよ」と声をかけられ、自分が必要と されていることに気付いていきました。私の心はこの十年で、強くなりました。神が私のずっと横に寄り添っていてくださる、ともに歩いて下さっているという実感がこれまでも今もあるからです。さて、10 年ぶりに訪れた十二所黙想の家はアルペナンミンセンターという施設になっていました。アルペ神父は広島に原子爆弾が投下されたとき、献身的に被爆者の治療にあたり、何人もの命を救った方です。アルペ神父には無条件の愛がありました。そのアルペナンミンセンターは難民の方が一時的に生活する、とてもにぎやかな

場所でした。出身国の踊りを披露してくれたり、一緒に歌ったり踊ったり、料理やお菓子を振る舞ってくれたり。研修ではフォトジャーナリストの安田菜津紀さんを講師として招いて講演を聴き、下関にある労働教育センターの中井神父さんが直接関わった難民の方の話に耳を傾け、アルペ難民センターで生活されている方のつらい体験を直接聞きました。私の当事者意識の低さを身をもって実感させられました。安田菜津紀さんの「身の危険が迫っている人が目の前に実際にいる。その人に『日本において』と言える社会になっているだろうか？」ということばは胸に刺さりました。今の日本の法律ではやむなく国籍のある国に行かなければならない(帰るではありません。その人にとっては生まれて初めて行く国なのです。)人に寄り添った中井神父さんの話も大変印象に残りました。アルペなんみんセンターの社会的意義を実感しました。他人事ではなく自分事にならないと人は動くことが出来ないことを痛感しました。そのためには困っている人の声を直接聞かなければなりません。今いる居心地のいい場所に満足していませんか？もっと外に出て足を運んでみてください。

母が癌になってから、自分にとって病気が身近になりました。他人事が自分事になったのです。抗がん剤のつらさも近くで感じました。手術で摘出された病変部を触ったときの感覚はよく覚えています。次女には先天性の心疾患があります。生後25日目に8時間にもわたる心臓外科の手術を受けました。病室に帰ってきたときの次女の姿は今も忘れません。次女は手術のときに輸血を受けることになっていました。手術の日の朝、私は次女を抱いて手術室に連れて行きました。そこで私は次女の血液型が自分と同じであることを知りました。親ですから自分の血液をその場であげたいと思いました。それは親ですから当然のことです。しかし、どなたかの無条件の善意によって提供された血液がすでに用意されていました。献血で提供した血液が誰に提供されたかを知ることは出来ませんし、提供された側も誰に提供してもらったかを知ることは出来ません。

ある日私は献血会場で声をかけられ、その場で骨髄バンクのドナー登録をしました。「何か役に立ちたい」という思考回路が働くのです。もちろんその日がやってきたら「はい」と返事をするつもりで。2021年春にその日は突然やってきました。自宅に「大切なお知らせです。すぐに開封して下さい。」と書かれたオレンジ色の大きな封筒が届きました。すぐに提供意思を示し、ドナー候補になりました。しかし、おそらく私よりも適している候補者がいたのでしょうか。2ヶ月後にコーディネート終了となりました。役に立ちたい気持ちこそあったけれど、役に立てず、無力感を感じました。仕方がないです。人生そういうこともあります。今年の夏、またオレンジ色の封筒が届きました。ところで、皆さんはHLAを知っていますか？赤血球にABO式の血液型があるように、白血球にも型があります。これは数万通りもあります。造血幹細胞移植を成功させるためにはこのHLAの一致が必要なのです。兄弟姉妹であれば4分の1の確率で一致しますが、非血縁者同士の場合は一致する確率が極めて低いのです。おそらくここに居る1000人のHLAは全員違うか、一致する組み合わせが仮にあったとしても非常に少ないでしょう。ですので、患者さんにとってもHLAの一致するドナーを探すのは大変で、移植を希望する方のおよそ半分の方しか移植を受けられないのが現状です。ドナーも骨髄バンクに登録してもHLAが患者さんと一度も一致しないの方が圧倒的に多いのです。二度目の適合通知が届いたときは、「こんな珍しいことが人生で二度もあるのか。人生ってわからないなあ」というのが最初の気持ちでした。次こそ役に立ちたい思い、今回もすぐに提供意思ありと返答しました。その後の検査などを経て一ヶ月もしないうちにドナーに選ばれました。骨髄提供は来月で、そのときの体験はどこかで話す機会がありそうなので、そのときにしたいと思います。一度目のコーディネートのときよりも実際にドナーに選ばれた今回の方が、血液の病気をより自分のものとして感じられるようになりました。骨髄移植のドナーは血液の病気と闘う患者さんとともに歩むパートナーだからです。骨髄ドナーの健康に関する基準は厳しく、軽微な生活習慣病でもドナー不適合になります。患者さんにとっては自分の命に関わることです。「今回私を選んでもらった。患者さんをごつくりさせたくない。絶対に検査に通ってみせる。」自分の血液の数値は大体分かっていますので、基準を外れる可能性がある項目について、生活習慣を徹底的に改め検査に臨みました。おかげで検査結果は良好でした。ドナーが検査で適格となり、移植が決定したと患者さんに伝わったとき、どれだけホッとしたらうか。患者さんがどんな方かを知ることは出来ません。しかしその見ず知らずの人のために本気になっている自分に気がきました。友人からは「よくそこまでやるよね」と。極めてまれな確率でしか一致しないHLAが私と一致している。その方がいま血液の病気と闘っていて、私を必要としている。顔こそ知らないけれど、知らない人ではないのではないか？これまで

の長い闘病がどんなにつらかっただろう、今頃検査入院かな、など患者さんのことをいつも考えるようになりました。患者さんは助かる道が開きつつあることを感じられ、それを希望にしてこの後のつらい治療も きっと頑張って乗り越えてくれる。そう信じています。

インド募金で募金することも無条件の善意です。ダミアン社会福祉センターのニルマラの子どもたちと六甲生 はインド訪問でしか顔を合わせることが出来ません。ですから迷いが生じることもあるでしょう。皆さんよくわかって いるようにインド募金には何も見返りがありません。募金とはそういうものです。それにもかかわらず毎月募金に協力してくれていることが、どれだけ素晴らしく意味と価値のあることか。インド募金を一度も出したことがない人は おそらくいないのではないのでしょうか？君たち全員、無条件の善意を持っているのです。こんど中 1・中 2 の皆さん は街頭で赤い羽根共同募金を呼びかけます。募金に入れて下さる方は無条件の善意を持っています。その気持ち に触れ、心からお礼を言って下さい。このような方と出会い続け、交流し続けることで、君たち一人ひとりの心が常に新しいもので満たされ続けるのです。これが生き生きしているということなのだと思います。誰かを助けていると同時に、自分自身が生かされているのです。

今日の話をもとめていきます。テーマは「無条件の善意について」でした。実感がわかないと、他人事が自分事 にならないと人は動くことが出来ません。そのためには体験が大切です。私たちは何も見返りを求めずに困った人 に手を差し伸べることが出来ます。無条件の善意は誰の中にもあるものです。これを日頃から心がけることが大 切です。

今日の夕方の振り返りは、難しく考えなくて大丈夫です。これまでの自分を振り返ってみて、無条件の善意を探 してみして下さい。誰かを助けたこと、誰かに助けてもらったことについて、書いてみて下さい。その中に自分の将来 の人生の道筋になるものを見つけられれば書いてみて下さい。

20231119 木

Magis の日講話

(青木光博：数学)

(第2グラウンドに集まった生徒は生徒会長の指示で座っている。わたしからは少しずつ隣と間隔をあけるように指示があり、すこし生徒間の間隔が空いている)

おはようございます。本日の Magis の日の講話担当の青木光博です。よろしくお願いします。

皆さんは今、文化祭が終わり、中間試験が終わり、校外学習にも行きました。今、頭にあることは何でしょうか。……そう、きっとガザ地区のことが頭にあると思います。(笑いが起こる。打ち消すように、) いや、でも、六甲生にはぜひそうあってほしいと思うのです。

先ほど調べてきましたが、ガザ地区の保健当局の発表によると、おととい7日の時点で死者が1万328人、内こどもが4237人亡くなっています。テレビなどの報道では戦争で子どもを失う父親が出てきて、泣き叫んでいます。でも、私は思うのですが、もっと苦しんでいる人はテレビには出てこないし、泣き叫ぶようなこともしない人、とくに子どもであると思います。子どもは両親が爆撃で殺される場所を目の当たりにしているかもしれない。わたしは、3人の子どもを持つ親ですが、例えば、そのうち2人を命からがら連れ出したが、もう一人を助けるために戻る父親を、追って落ちてくる爆撃によって、もう一人とともに亡くすかもしれない。そうしたらその残されたこどもはもう、いいですか、テレビで私たちは一瞬見ているだけですが、そのこどもにとってはも

う、一生親はおらず、親は戦争で殺されたということを背負って生きていくことになるのです。わたしは思うに、最も恐ろしいところは、これらが天災ではなく、人が意志を持って、殺そうとしておこなわれていることです。

砲弾を打つ側は正義だと思って打っているでしょう。このような時、人を真に動かすものは金ではない。名誉でもないかもしれない。それは正義、あるいは自分は正義だと思っている感情です。殺そうと思って放たれた銃弾はその先に死を造るだけではなく、不幸を作っているのです。そして不幸に耐えきれなくなって負けるとする。果たして勝った方は正義といえますか。

……さて、今日の Magis の日はルカによる福音書 10 章の 25 節からをとりあげます。5 月の中村厚太先生の Magis の日、雀部先生の中学朝礼でも紹介されています。今日、この時勢の中でもう一度取り上げます。

すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、彼は答えた。「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコに下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を歩いて行った。同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を歩いて行った。ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って、傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡していった。『この人を介抱して下さい。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

お馴染みのこのたとえ話です。わたしも小さいころから何度となく聞いてきたこの話ですが、特にこの1年で何度もこの話に触れる機会がありました。六甲でのお二人の朝礼のお話もちろんですが、教皇のメッセージや、教員の研修、そして個人的な霊操の課題として与えられもしました。たくさん学んだ中で、いま私が考えていることを皆さんと分かち合いたいと思います。

はじめに、この話は「イエスの話」の中の「たとえ話」ですから、入れ子構造になっています。イエスは律法の専門家に意地悪な質問を受けます。意地悪なのは私の一方的な思い込みでなく、聖書のテキストに「試そうとして言った」と書いてあります。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」

君たちにとって「永遠の命」というのはあまり実感が湧かないかもしれません。「生きるうえで最も大切なこと」とか「もっとも大切なもの」と読み替えてよいと思います。そこで、イエスは答えます。「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と尋ねます。ここで2つの質問をされていることに注意しましょう。①何と書いてあるか②どう読んでいるか、です。これが別々の質問として意味を成すということは、「どう読んでいるか」とはつまり「実際の生活にどう生かしているか」ということでしょう。律法の専門家はそれに答えます。「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」イエスはこれに「正しい答えだ」と答えるわけですが、これは質問①の答えなのです。だから、律法の専門家は質問②「どう実行しているか」に答えていません。だか

ら、律法の専門家は「自分を正当化しようとして「わたしの隣人とは誰ですか」と答えるわけです。律法の専門家は質問②に答えていないことを分かっているのです。

さて、イエスは追いはぎ、これもまた人が意志を持って傷つける行いですが、追いはぎに襲われた人を助けるサマリア人のたとえ話を続けます。祭司もレビびとも、つまり身分が高く、恵まれている人々はすべて道の向こう側を通って行ってしまいます。祭司もレビ人も「助けなければならない」ということは分かっていたはずですが。しかし実際は道の向こう側を通って行ってしまったわけです。そうするには、「自己正当化」といえる言葉がけを自分にしていたはずですが。一体どのような言葉がけをしていたのでしょうか。考えてみましょう。

3人目は旅をしていたサマリア人です。サマリア人がやったことをまとめてみましょう。

①そばに来る

②隣れに思い（近寄って）

③傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、

④自分のろばに乗せ

⑤宿屋に連れて行って介抱した

翌日になると

⑥銀貨二枚を宿屋の主人に渡し、『介抱してください』『足が出たら帰りに払います』

というわけです。そして、まさにこの態度が示すものが、私たちが六甲学院という世界の中のイエズス会学校の一校で学んでいる意味と言えます。今からそれを説明します。まず、復習ですが、イエズス会学校の4c'sというものは覚えていますか。Competence（有能さ）、Compassion（共感）、Conscience（良心）、Commitment（コミットメント）です。

当時サマリア人とユダヤ人は互いに憎み合っているといっても良いような関係でした。いま、パレスチナのハマスとイスラエルが殺し合っていますが、まるでそのような関係だったといってもいいかもしれません。

このたとえ話に登場するサマリア人は、傷ついたユダヤ人に、歴史を問いません。民族のいさかきも問いません。またそのユダヤ人自身はもしかしたら過去に悪いことをしたのかもしれない。追いはぎを襲おうとして逆にやられたのかもしれない。でも、サマリア人はそれを問いません。その傷ついている姿を見て、隣れに思うわけです。これが、5月に厚太先生が強調された Compassion（共感）です。次に傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をする、ということは、つまり必要で合理的な治療をするということです。これが私たちの Competence（有能さ）です。傷ついた人を自分のろばにのせること、宿屋に連れて行って介抱し、宿屋の主人に引き継いで、お金は払いますということこれらが Conscience（良心）であり、これらすべての行いが Commitment です。

私は、小さいころに読んだこの話で「宿屋の主人に任せて大丈夫か、ぼったくられないか」と思ったものです。皆さんもそうは思いませんでしたか。私は今は次のように思います。サマリア人は多くの宿屋から信頼できる宿屋を見定めたのだろう、そして、このサマリア人と同じように介抱して世話をしてくれそうな宿屋の主人を探したのだろうと思います。これは人間を知り、人間を見る目がある有能さとも思います。

六甲で単なる公共心、道徳だけが教えられるのであれば、それはもはやイエズス会学校ではなく、普通の学校です。イエズス会学校はそのような「ふつうの道徳」は「ふつうにできて当然のこと」なのです。わたしたちイエズス会教育が目指す人間像はより特別なことです。それは良きサマリア人のように振舞える人間となることです。でも、堅苦しくなることはありません。

ここで、わたしから六甲生に5つ目のCをお伝えしたいと思います。初めに断っておきますが、この5番目のCはわたしの個人的な考えです。5番目のCそれは Courage（勇気）です。六甲生にいま必要なことに思います。Commitment に与るために一歩踏み出す、その勇気のことです。自分のコンフォート・ゾーンを抜け出し、あえてやってみる。その勇気 Courage です。論語ではこれを「義を見てせざるは勇無きなり」と言いました。私たち

イエズス会学校ではこの義が、良きサマリア人であることとするのです（時間の関係で、当日の Magis の日はここまでしか話せなかった）。

もちろん最初からこのサマリア人のように完全にできるひとはいません。しかし、私たちはサマリア人の行動のごく一部はすでにやっているはずです。

例えば、インド募金です。インド募金をするとき、この見ず知らずの人を助けたサマリア人のことを思い出すのです。

また、登下校中に倒れている人を介抱する、それはサマリア人の「そばによる、憐れに思う」ということができています。横断歩道を渡りきる手助けをすることは「自分のろばに乗せる」ということです。私たちは完全にすべてをできることはごく稀です。たいていの場合不完全です。しかし、完全にできないからやめてしまうのではなく、一部でもできることがあるのではないのでしょうか。わたしたちの、おこないをふりかえりましょう。一部でもできた、という体験はありませんでしたか。あるいは一部でもできたのに、やめてしまったことはありませんでしたか。一步踏み出せるようになることを祈りましょう。

人が絡むところには必ず弱い人がいます。経済政策によって苦しんでいる人はこの神戸にもたくさんいます。昨日は労働問題で過労死した人の話を聞きました。どんな政治があっても必ず小さくされた人が居続けます。その人のために仕えること、これが六甲生と六甲卒業生の務めです。

最後に、たとえ話の後に注目しましょう。

まずイエスに意地悪な質問をした律法の専門家ですが、この話を聞いた律法の専門家がこの後どのようなようになったかは書かれていません。聖書にはよくある展開です。人であり神であるイエスが目の前におり、自分の個人的な質問に丁寧に答えていただいたのです。おそらくこの悪意のあった律法の専門家は「大切なことを教えられた」とは思わなかったでしょう。もともと、質問が悪意に満ち、心が頑なであったからです。わたしたちはこれに似たようなことをしていないでしょうか。悪意を持って接し、大切なことを聞き入れない態度です。

次に、イエスの態度です。悪意ある専門家の試すような態度にイエスはどのように対応したのでしょうか。悪意を指摘するのでも、無視するのでもなく、正しい答えをこたえるのみならず、そのような相手に対して、「行って、あなたも同じようにしなさい」と勇気づける言葉をかけています。わたしたちもおなじようにできるように、主に願いましょう。

<メモ>

- 祭司…立法により、死体やけが人の血に触れると汚れるとされていた
- レビ人…祭司を補佐していた
- 油とぶどう酒…薬だった。オリーブ油はいやし儀式に用いられた
- 「神が（このように）わたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです」ヨハネの手紙一、4:11。I love you に対する応答は普通、I love you, too.である。よって、上の言葉は「わたしたちが互いに愛し合う」ということがこの I love you, too に対応する。互いに愛し合うことが神の愛に返答することに対応するのだ。